Hanakoよ、永遠なれ

矢野　達雄

南海放送は、わたしにとって何となく近しい存在のように思っていた。わたしの家はもともと大手町にあったが、同社の社屋も現在の愛媛新聞社の横手にあり、わたしの家からごく近いところにあった。また、友達の家に南海放送のアナウンサーが下宿していた関係もあって、同社のアルバイトをしたこともある。その後南海の社屋は道後樋又に移転したが、これは現在のわたしの勤務先と目と鼻のさきである。余談ではあるが、わたしの結婚式も南海放送本町会館であった。

その南海に、「契約従業員」なる制度があるのを知ったのは、もう１０年以上むかしになる。聞くと、アナウンサー以外の女性社員は１年ごとの契約で、更新も３回かぎりだという。してみると、本町会館でわたしの結婚式のお世話をしてくださったあの人も、さっそうとＣａｐｙに乗っていたあの人も、サンパークのおねえさんもみな契約従業員だったのか。近しいと思っていた南海放送が、一歩遠くなったような気がした。しかし、そのころはまだ、この制度はおかしいと積極的に声をあげるような女性はいなかった。みんな女性差別だとおもいながら、会社の決めたとおりの年限にしたがって退社していったのであろう。

その後、今度はわたしの勤務先（愛媛大学）で、似たような問題が火をふいた。国立大学には「日々雇用職員」というわけのわからない制度がある。これは、１日契約の非常勤職員で、その任用を繰り返すのだという。しかし、じっさいには常勤職員と同じように勤めてつづけていた。男性もまれには存在するが、そのほとんどは女性である。しかしあるとき大学は、トップが交替したのを機に、この「日々雇用職員」全員を解雇すると言いだした。「そんな無茶な、それではその人たち全員が路頭にまようようになる」と、組合は立ち上がった。わたしはたまたまそのとき組合の委員長をしていたために、いやおうなしにこの渦の中にまきこまれてしまった。その後の紆余曲折は省略するが、最後には大学は折れ、その人たちも本人がやめたいと言わないかぎり勤めつづけられることになった。さすがに“理性の府”にふさわしい結末であった、というべきであろう。

そうこうしていると、南海放送の契約従業員のことがまた問題になってきたということを耳にしはじめた。ついに「この制度はおかしい」という声をあげる女性が出てきたのだ。その名を、Ｈａｎａｋｏという。Ｈａｎａｋｏは、もちろん個人の名前ではない。女性差別の労務管理に異議をとなえ、声をあげた

契約従業員たちの総称だ。愛媛という保守性のつよい土地にも、ついに目覚めた女性が！というとおおげさだが、おかしいことはおかしいと自分の意思をはっきり主張する女性が誕生したのだ。しかし、会社は頑固にも契約は契約だとして、期限どおりの解雇をゆずらないのだそうだ。南海放送という会社が、またもう一歩わたしたちから遠くなったような感じがした。

市民の多くが同じようなかんじをもったものとみえる。新聞の投書欄にＨａｎａｋｏ問題をとりあげるものが多くなった。県女性総合センターで開かれたＨａｎａｋｏの集会「花より平等」も、大盛会だった。女性差別撤廃条約が採択されて３０年、男女雇用機会均等法が実施されて１０年、いまだに男尊女卑の観念からぬけだせない、「社会の木鐸」というにはあまりにお粗末な言論機関にたいして市民が突きつけたＮｏの声だった。

Ｈａｎａｋｏのなかでも、喜安由香子さんの存在はきわだっていた。彼女については、いちばん最初に期限が到来した。会社もいったんは１９９５年３月末で解雇のてつづきをとったのだけれど、彼女が裁判も辞せずとのつよい態度をいっかんして保持しつづけたので、会社も和解案を提示して折れざるをえなかった。権利の確信に裏うちされた主張は、あらゆる妨害をはねのけていつかは実をむすぶのだ。このことを身をもって示した彼女の姿勢に、わたしは脱帽した。また、これを支えつづけた南海放送労組の態度も、労働組合ならあたりまえという評価もあろうが、あたりまえでない労組が多すぎる今日、立派だったと思う。

あとにつづくＨａｎａｋｏのひとたちの去就については、いろいろと意見も分かれよう。しかし、喜安さんもふくめて彼女たちは、確実に愛媛の女性史の１ページを開いたと思う。あたたかく、送り出してあげたい。

“Ｈａｎａｋｏよ、永遠なれ”と。